

またバリに来ることになった。バリを選んだ理由は、前回（2008年12月）の印象が良かったことと、フライトのチケットが安く入手できた訳でもある。

バリに着いて、5日目、いま Ubud の町外れの Sari Organic という Cafe にいる。ここは車では来れない。バイクが通るのが精一杯の細く蛇行した農道があるのみ。お陰で荒れないで済むようだ。360度見回しても、緑の rice field（つまり田んぼ）と椰子の木が見えるだけ。

そこを風が通り抜けていく。

初めてバリに来たのは約20年前、修士の1年の夏だった。学部4年の研究室でお世話になった Ratna さん（当時インドネシアの留学生）を訪ね、ジャカルタの実家に厄介になった折、バリへ行くことを強く勧められたためだった。

Ratna さんは今思うと、稀有な人だった。研究室では並列計算機を専攻し、サイドワークとして「一休さん」や、さんまのバラエティ番組のインドネシア語字幕の翻訳をされていたようだ。実家で伺った話では、一種の靈感（予知能力）をもたれているとのことで、そんな高貴な空気をもたれていた。

あれから20年、Ubud はもはや「村」ではなく、立派な町だ。至るところ舗装道路になり、世話になったロスメン（安宿）はどこに行ったのやら。懐中電灯なしでは歩けず、野犬に追われた真っ暗な夜は、どこにもない。

。。とはいうものの、Ubud は Ubud らしさを無くしていないようだ。

今回、縁あって泊まれた Komaneka (<http://www.komaneka.com/>) は そんなことを感じさせるところだった。モダンな建築と、バリの古い工芸美術のエッセンスを高いレベルで融和させるセンスと努力に、脱帽だった。漆黒の夜と、吠える野犬と、田園を失くした反面、こんなユニークな方向に進んでいるとは。。

20年前、Ubud のロスメンに数日滞在した私は、ボケたくなかったのか、「流体力学」の教科書を読んでいた。

滞在中に結局、数ページしか読めなかったと記憶している。 そのくせ生意気に、あれこれと夢や野望や理想が頭のなかで飛び交っていた。

あれから20年、おそらくそれほど事情は変わっていないのかも知れない。

当時、1冊だった教科書は、今回は数冊の実務の実用書や般若心経やらに化けたけれど。

頭の中に飛び交っていた夢は、もはやそれほど漠然とはしていないけれど。

Ubud が、これからも Ubud らしくあってほしいという願いは、実は20年前とそれほど変わらず、変わらないでいることが出来た自分の一部を映している小さな「鏡」のような気がする。

(3・26・2010 Sari Organicにて)